

令和 5 年 5 月 7 日現在

機関番号：37111

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12248

研究課題名（和文）西洋近世美術における「アジア」のイメージ

研究課題名（英文）The Image of "Asia" in Early Modern European Art

研究代表者

落合 桃子 (Ochiai, Momoko)

福岡大学・人文学部・准教授

研究者番号：40434237

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：西洋近世美術において「アジア」はどのように表象されてきたのか。本研究では四大陸図（ヨーロッパ・アジア・アフリカ・アメリカ）中のアジアの寓意表現の収集・分析を通じて考察した。運作版画が多いオランダなどの作例と、教会や宮殿の装飾を中心とするイタリアや南ドイツなどカトリック圏の作例に大きく分類することができ、いずれにおいてもアジアはラクダや香炉などと共に描かれるのが定型となっていた。しかし、前者ではインドや中国などの東南アジア・東アジアの人物や文物が描かれることが少なくないのに対し、後者ではオスマン帝国など中近東のイメージが登場する傾向が見られるなど、地域差も浮かび上がってきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

上記の結果を具体的な美術作品に即して検討するため、西洋近世美術の四大陸図で重要かつ最大規模の作例である、ティエポロによるドイツ・ヴェルツブルク司教宮殿（レジデンツ）階段室天井フレスコ画（1752-53年）を考察した。この研究成果については、査読付き論文「ティエポロ《アポロと四大陸》（ヴェルツブルク）の象について」（『デアルテ』九州藝術学会、第39号）として発表した。四大陸図は欧米の文化史研究でも注目されているテーマであるが、本若手研究では、アジアの表象を取り上げたことで、日本人研究者として独自の視座を提示していくための土台を築くことができた。

研究成果の概要（英文）：In this research, I have examined representations of "Asia" on allegories of the Four Continents Europe, Asia, Africa, and America in European art of the 16th through 18th centuries. Two broad traditions can be identified. The first one is based mainly in the Netherlands, where we can find many print series; the second one originates in catholic areas such as Italy and southern Germany, where the Four Continents was represented in the decorations of churches and palaces. The personification of Asia was typically allegorized with a camel and an incense burner. However, regional differences can also be identified. The first tradition often depicts people and objects from Southeast Asia or East Asia, such as India and China, while the second tradition tends to feature images of the Middle East, such as the Ottoman Empire.

研究分野：西洋美術史

キーワード：四大陸 アジア ティエポロ バロック 象

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

中世以降、世界は三大陸（ヨーロッパ・アジア・アフリカ）として捉えられてきたが、16世紀から18世紀にかけて、アメリカを加えた四大陸を主題とした美術作品が、数多く制作されるようになった。その背景には、コロンブスによるアメリカ海域到達や、カトリック教会の世界的な広がりなどがある。本研究では、西洋近世美術の四大陸図（ヨーロッパ・アジア・アフリカ・アメリカ）中のアジアの寓意表現を取り上げ、西洋美術におけるアジアのイメージを検討する。ヨーロッパ人のアジアへの視線は、中近東からインド、中国、そして日本へと広がっていき、17世紀後半から18世紀にかけてシノワズリー（中国趣味）が、19世紀後半から20世紀前半にジャポニスムが流行していくことになる。本研究課題は、アジアに位置する日本人であるからこそ取り組むべきテーマであり、欧米を中心とする西洋美術研究に新たな視点をもたらすことができる。

2. 研究の目的

西洋近世美術における四大陸図のアジアの寓意表現を分析・比較することで、16世紀から18世紀の西洋美術におけるアジアのイメージを考察する。ヨーロッパにおけるアメリカの表象に関する研究にオナーの著作（1975年）があるが、アジアのイメージに関する包括的な研究は管見のかぎり見当たらない。

アジアの寓意像は、リーパ『イコノロジーア』（初版1593年、1603年）にあるように、香炉や棕櫚の葉を持ち、ラクダを伴った人物として表現されるのが定型となっていた。四大陸はまた、ベルニーニ《四つの河の噴水》のように、各大陸を流れる大河（ドナウ川、ガンジス川、ナイル川、ラブラタ川など）の河神像として表されることもあった。そして18世紀になるとイタリアの画家ティエポロは、ラクダではなく象と共にアジアの寓意像を表現した。こうした図像変化の背景には、ヨーロッパにおけるアジア諸国に関する知識の増加があったのではないかと仮説を立て、研究を進めた。



ベルニーニ《4つの河の噴水》
1648-51年、ローマ

3. 研究の方法

近世美術における四大陸図のアジアの寓意表現について、絵画や版画などの作例の収集・分析を通じて検討していく。具体的には以下の方法で考察を進めた。

(1) 16世紀から18世紀にかけて制作された四大陸図のアジアの作例の収集。西洋近世美術の四大陸を主題とした作品について、文献や海外美術館インターネットサイトなどで情報を収集する。現地に赴いて主要作例の写真撮影などを行い、国内で入手困難な文献や資料を海外の図書館などで閲覧複写する。

(2) (1)で収集したアジアの作例の検討。アジアの寓意表現の作例を分類比較し、描かれたモチーフの変遷や地域差などを検討する。

(3) (2)の成果を具体的な美術作品に即して検討するため、西洋近世の四大陸図で重要かつ最大規模の作例である、ティエポロの《アポロと四大陸》（ドイツ・ヴェルツブルク司教宮殿（レジデンツ）階段室天井画、フレスコ、1752-53年）を取り上げる。本作品ではアジアの場面にラクダではなく象が登場する。これについて図像的観点から考察する。

4. 研究成果

(1) 四大陸を主題とする絵画・彫刻等について、西洋近世絵画の図像目録であるピグラー『バロックターメン』(1974年)には、イタリア・オランダ・ネーデルラント・フランドル・フランス・ドイツなどの作例78点ほどが挙げられているが、西洋近世の四大陸図像に関する基礎文献であるペシエル(1985)も参考にしながら、作例収集を進めた。2018年9月2-10日、2019年2月28日-3月14日、2019年8月12-22日の日程で海外調査を実施し、アンドレア・ポッツォ《聖イグナティウス・デ・ロヨラの栄光》、バルニーニ《四つの河の噴水》(以上、ローマ)、ヤン・ファン・ケッセル《四大陸》(ミュンヘン)、ティエポロ《アポロと四大陸》(ヴェルツブルク)、ヴェルサイユ宮殿アポロンの間天井画、カルポー《天球を支える世界の四大陸》(パリ)など主要作例を実見して写真撮影を行うとともに、ベルリン国立図書館とミュンヘン中央美術史研究所、ハンブルク美術工芸博物館アーカイヴで文献資料の調査を実施した。

(2) 上記(1)で収集したアジアの作例を比較検討した結果、以下のことが明らかになった。近世ヨーロッパの四大陸図は大きく2つの系統、すなわち、オランダを中心に制作されたもの(連作版画が多い)と、イタリア・南ドイツなどカトリック文化圏のもの(フレスコ画など室内装飾が多い)に分類することができる。アジアの寓意像に関しては、いずれにおいてもリーパ『イコノロジー』にあるように、香炉やラクダと共に描かれるのが定型となっていたが、オランダの作例では、インドや中国など東南アジア・東アジアの人物や文物が描かれることも少なくないのに対し、イタリアや南ドイツの作例では、オスマン帝国など中近東のイメージが登場する傾向が見られた。東インド会社を通じたアジア諸国との直接的交流や、対オスマントルコ戦争などが、アジアのイメージに影響を与えていたと考えられる。

(3) 上記(2)の調査結果を具体的な美術作品に即して検討するため、ティエポロによるドイツのヴェルツブルク司教宮殿(レジデンツ)階段室天井画《アポロと四大陸》(1752-53年)のアジアの場面を詳細に考察した。上述のように、イタリアや南ドイツなどのカトリック圏では、四大陸が教会や宮殿などの装飾の主題として好んで取り上げられていたが、ティエポロの本作品もこうした系譜に位置づけることができる。

《アポロと四大陸》のアジアの場面にティエポロは、ラクダでなく象を、それも縦長の大きな耳をした「アフリカ象」を描いている。画家はいったいなぜ、アジアの動物として象を選んだのか。アシュトン(1978年)は本作品の図像的着想源として、大航海時代の旅行記を指摘している。たとえばフランス人旅行家フランソワ・ベルニエの『ムガル帝国誌』(1699年)には、豪華な装具を身に付けた象に乗る王や、象に乗って戦う兵士たちを描いた挿絵を見つけることができる。しかし、ティエポロが描いたのは、三角に近い小さめの耳を持つ、いわゆるインド象ではなく、アフリカ象なのである。旅行記とは異なるイメージソースがあるのではないかと考えられるのである。

そこで、象が描かれたティエポロの他作品、パラッツォ・ドルフィン油彩画連作(1726-29年)の《ローマの勝利》に手掛かりを求めた。本連作については、マンテーニャ《カエサルの凱旋》やジュリオ・ロマーノ《スキピオの物語》との関連が指摘されているが、ここにも象が登場しており、とくに前者にはティエポロが描いたのと同様のアフリカ象が見られる。これらの象は、ハンニバルやピュロスなど古代ローマの敵の戦象であった。そして、パラッツォ・ドルフィン油彩画連作に描かれた古代ローマの戦争には、ヴェネツィアの対トルコ戦が重ねられていると指摘されている。《アポロと四大陸》の象もまた、こうした象のイコノグラフィの下にあり、ここ

にキリスト教世界の外敵であったオスマントルコないし東方世界が含意されていたと考えられるのである。

当初、ティエポロ《アポロと四大陸》のアジアの場面にラクダではなく象が登場した理由について、ヨーロッパ人のアジア旅行記などを通じ、より現実に近いアジアのイメージが描かれるようになったためだと考えていた。しかし、ティエポロの象は、絵画作品に描かれた古代ローマの外敵の象が下敷きとなっており、18世紀中頃になってもなお、少なくともティエポロ周辺においては、アジアのイメージが限定されたものであったと想像される。

本研究成果については、査読付き論文「ティエポロ《アポロと四大陸》(ヴェルツブルク)の象について」として『デアアルテ』(九州藝術学会、第39号)に発表した。

(4) 本研究課題に関連して、ドイツ南部の都市ミンデルハイムのマリア受胎告知教会 (Mariä Verkündigung) の四大陸図について、久留米大学の大場はるか准教授よりご教示があり、共同で調査を進めた。落合は教会内の説教壇と、同教会内フランシスコ・ザビエル礼拝堂のストウッコ装飾、ならびにストウッコ作者 Matthias Willerotter についてドイツ語で執筆し、これらの記事がウィーン大学「バロック時代の四大陸アレゴリー」データベースに掲載された。Momoko Ochiai, Mindelheim (Unterallgäu), Mariä Verkündigung (Kanzel, Franz-Xaver-Kapelle, Matthias Willerotter). In: Wolfgang Schmale (Projektleitung): Erdteiallegorien im Barockzeitalter, Wien.

(5) その他、研究を遂行する過程で、西洋近代美術におけるアジアに関する知見を得ることもでき、ドイツで活動した刀装具研究家の原震吉 (1868-1934) と、インドネシア美術に関心を持っていたオランダ人芸術家トルン・プリッカー (Johan Thorn Prikker, 1868-1932) について調査研究を進めることができた。

西洋近世における四大陸図は、上記のウィーン大学のプロジェクトのように、欧米の文化史研究においても注目されているテーマであるが、本若手研究では、そのうちアジアの寓意表現を上げたことで、今後日本人研究者として独自の視座を提示していくための土台を築くことができた。今回の研究によって、西洋近世の四大陸図のアジアの表現には、オランダや中南欧などで地域性があることが浮かび上がってきたため、今後は作例をより具体的に検討していくことで、西洋美術におけるアジア・イメージの多様な展開を明らかにしたい。

〈引用文献〉

- Ashton, Mark. "Allegory, Fact, and Meaning in Giambattista Tiepolo's *Four Continents* in Würzburg." *The Art Bulletin*, vol. 60, no. 1, 1978, pp. 109-125.
- Honour, Hugh. *The New Golden Land: European of America from the Discoveries to the Present Time*, Pantheon, 1975.
- Pigler, Andor. *Barockthemen. Eine Auswahl von Verzeichnissen zur Ikonographie des 17. und 18. Jahrhunderts*. 2nd ed., vol. 2, Akadémiai kiadó, 1974, pp. 521-523.
- Poeschel, Sabine. *Studien zur Ikonographie der Erdteile in der Kunst des 16.-18. Jahrhunderts*. Diss. Westfälische Wilhelms-Universität zu Münster, 1984. Scaneg, 1985.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 1件）

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 落合 桃子 | 4. 巻 第39号 |
| 2. 論文標題 「ティエボロ《アポロと四大陸》（ヴェルツブルク）の象について」 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 『デ アルテ』（九州藝術学会） | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 Momoko Ochiai | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 Mindelheim (Unterallgaeu), Maria Verkuendigung (Kanzel, Franz-Xaver-Kapelle, Matthias Willerotter) | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 Wolfgang Schmale (Projektleitung): Erdteilallegorien im Barockzeitalter, Wien | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 該当する |

| | |
|--|----------------------|
| 1. 著者名 落合 桃子 | 4. 巻 第40号 |
| 2. 論文標題 「原震吉 - ハンブルク美術工芸博物館の日本人の刀装具研究家」 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 『ジャポニスム研究』（ジャポニスム学会） | 6. 最初と最後の頁 36-54頁 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 落合 桃子 | 4. 巻 第192冊 |
| 2. 論文標題 （発表要旨）「ドイツ・クレーフエルト時代のヨハン・トルン・ブリッカーと日本の染型紙」 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 『美術史』（美術史学会） | 6. 最初と最後の頁 346頁 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|----------------------|
| 1. 著者名 落合 桃子 | 4. 巻 第39号 |
| 2. 論文標題 (発表要旨)「秋田の医家に生まれ、ドイツで日本美術専門家になる 原震吉の生涯と仕事」 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 『ジャポニスム研究』(ジャポニスム学会) | 6. 最初と最後の頁 79-80頁 |
| 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計4件(うち招待講演 1件/うち国際学会 1件)

| |
|---|
| 1. 発表者名 落合 桃子 |
| 2. 発表標題 「ジャンバッティスタ・ティエポロ《アポロと四大陸》(ヴュルツブルクのレジデント「階段の間」フレスコ画)におけるアジアの寓意表現について」 |
| 3. 学会等名 九州藝術学会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 落合 桃子 |
| 2. 発表標題 「西洋近世美術における「アジア」のイメージ - ヴュルツブルクのレジデント「階段の間」天井画を中心に」 |
| 3. 学会等名 愛媛大学人文学会公開講演会「ドイツにおけるジャポニスム」(招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 落合 桃子 |
| 2. 発表標題 「ドイツ・クレーフエルト時代のヨハン・トルン・ブリッカーと日本の染型紙」 |
| 3. 学会等名 美術史学会西支部例会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 落合 桃子 |
| 2. 発表標題 「秋田の医家に生まれ、ドイツで日本美術専門家になる 原震吉の生涯と仕事」 |
| 3. 学会等名 ジャポニスム学会国際シンポジウム2019「人の移動とジャポニスム」(国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
| | | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
| | |